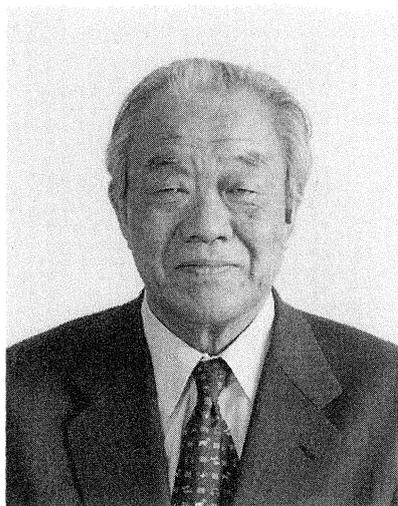


文化力による 平和の実現

文化庁長官
河合隼雄



かわい・はやお 1928年兵庫県生まれ。臨床心理学者。教育学博士。京都大学名誉教授。国際日本文化研究センター所長等を経て現職。スイスユング研究所で日本人として初めてユング派分析家の資格を取得。臨床心理学者としての立場から、教育、政治、文化に幅広く貢献。著書や論文は多数。近著に『大人の友情』（2005年、朝日新聞社）、『心の扉を開く』（2006年、岩波書店）、『神話の心理学』（2006年、大和書房）など。1995年紫綬褒章受章、2000年文化功労者顕彰。

二一世紀を迎えた今日の世界には、平和に生活する人々がいる一方で、民族、宗教間の対立や紛争、テロといった問題に直面している人々もおり、このような実状に対して、国際的な解決に向けた取組と平和の実現が求められている。このような国際情勢の中で、我が国においても、いかにこのような問題に対処し、貢献していくかが重要な課題となっている。我が国としての取組は、これまでは経済支援や人道支援が中心であったが、今後は文化交流を通じた相互理解、共存の道を探っていくという視点が必要ではないかと思う。世界の多くの国々と文化交流を進め、お互いのよい所を知り、尊敬し合っていくという姿勢が大切である。

こうした観点で我が国における文化交流の状況を考えてみると、これまで日本は海外文化を輸入することを中心に考え、日本文化を海外に発信する点では積極的ではなかったといえるのではないだろうか。ただ、海外の文化を取り入れることで日

本の文化を維持し、これを昇華して、さらに日本的なものを生み出していったことは注目すべきことだ。これについて、私は日本の神話にその特徴が認められるのではないかと考えている。日本の神話は、圧倒的排他的な価値が中心に存在しない「中空構造」となっており、絶対的な神様がいない代わりに周りの神様がバランスを取っているのである。日本のこうした「中空構造」の文化は、グローバル化が進む中で多様な文化が共存していく必要のある二一世紀の世界に対し、重要なメッセージを持つと考えている。

ここで、国際文化交流について文化庁としての施策を紹介したい。

文化庁では、世界の人々の日本文化への理解を深めてもらうとともに、世界の芸術家や文化人とのネットワークの形成、協力を推進していくため、「文化庁文化交流使」事業と「国際文化フォーラム」事業を実施している。

「文化交流使」は一定期間海外に滞在し活動するもので、単発の公演のみにより日本文化を紹介するのではなく、文化交流使自身が海外の生活の中に溶け込みながら、日本の文化を紹介できるところが強みである。例えば日本の伝統芸能である能や歌舞伎についても、演じるだけではなく、その歴史、背景、衣装、道具の意味などをあわせて紹介することで理解をさらに深めることができる。また、日本古来の伝統文化だけではなく、マンガやアニメ等のメディア芸術、落語などの大衆文化まで幅広く紹介することで、いま隆盛を極めている旬の日本文化、さらには日本人の生き方までを伝えることにつながっている。先日、文化交流使として海外で活躍した落語家の方が「落語を見て、日本人もジョークを言うのかと驚かれた」と話していたが、日本人に対する固定観念や偏見を変えるためにも、日本文化のさまざまな側面を紹介することが不可欠であろう。

「国際文化フォーラム」では、毎年海外の著名な文化人・芸術家を関西地域を中心に招へいし、文化の多様性をテーマにさまざまな視点から議論を深めている。その中には困難に直面する中東問題に関し、パレスチナとイスラエルとアメリカの文化人が一堂に会し、平和について語る座談会もあり、政治的な面では難しい問題を抱えている場合でも、文化交流という観点から対話を進めることは可能であることを実感させてくれる。その他、各国の神話と文化の関連性について議論したり、アジア諸国の美術、文学について話し合ったりといへん興味深い議論がなされている。さらに、会場を法隆寺や三重県の賓日館ひんじつかんなど日本の伝統的な建築物や文化財である

施設で開催することで、日本の生活や文化に触れながら議論を深めていただくことができ、外国人ゲストにもたいへん好評であると聞いている。

また、国際文化交流でもう一つ重要な課題は、近隣諸国との交流である。特に韓国、中国とは政治的な面では困難な問題もあるが、文化の面の交流はより一層緊密にしてはどうかと思う。とりわけ、国民一人ひとりが他国の国民とじかに触れあう草の根的な交流が大切だと考えている。

昨年は日韓友情年ということもあって私自身何度か韓国を訪問することができ、韓国の文化人とも直接話をする機会が多くあったが、文化交流はどんどん進めようという点では常に意見が一致した。日本ではドラマ、映画の韓流ブーム、韓国では日本の小説が日流といわれるほど人気があり、相互の文化の理解と交流が定着している。こうした状況の背景には互いの文化に興味と関心があり、相手の文化や生活をもっと知りたいという考えがあるからではなからうか。最近では、互いのことを学ぶだけでなく、例えば演劇の分野などでは日韓の創作者が共同して作品を作り上げる例が生まれるなど、日韓で新しい文化を創りあげ、世界に発信するという取組も始まり、新たな局面に入ったと実感している。日韓の文化交流では若者を中心に新しい展開が生まれることが期待される。

国と国との関係は難しいもので、簡単に現下の状況を打開することが難しいことは十分認識しているが、文化交流は政治を超える力を持っており、このような心の交流を続けていくことで世界に平和が訪れることを願っている。

(平成一八年八月七日執筆)